

## 高齢者から“ケアされる”体験のプロセス

### —学生のケアリング場面の分析—

小松美砂\* 濱畑章子\*\*

\* 四日市看護医療大学 \*\* 朝日大学保健医療学部看護学科

## The Process of Experiencing “Being Cared for” by Older Adults: Analysis of Caring Settings of Students

\* Misa Komatsu, \*\* Akiko Hamahata

\* Yokkaichi Nursing and Medical Care University

\*\* Asahi University School of Health Sciences Department of Nursing

#### <要旨>

目的: 老年看護学実習後に学生がケアされる体験をしたと振り返った場面を分析し, 学生が高齢者とケアリングを形成するプロセスを明らかにすることを目的とした。

方法: グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて, 看護学生 24 名に半構造化面接を実施し, 継続比較分析により学生と高齢者とのケアリング場面を分析した。

結果: 学生が高齢者から“ケアされる”体験のプロセスとして, ≪高齢者からケアされる感覚≫という 1 つのコアカテゴリーと, <高齢者への尊敬><高齢者との距離感><自分への自信のなさ><身近な存在となる高齢者><高齢者から得る喜び><高齢者との充実した関わり><実習することの喜び><明日の自分への活力>の 8 つのサブカテゴリーが明らかになった。学生の高齢者へのイメージや感情は, 実習体験を通して, 高齢者を身近な存在として感じることでより強くなっていた。学生は, 高齢者にケアしようと思って実習に臨んだが, 高齢者から“与えられる”体験をし, 高齢者からケアされていることを実感していた。

結論: 学生が高齢者から“ケアされる”体験は, <高齢者への尊敬>という学生の感情を高めるといった意義があり, サブカテゴリーにみられる学生の体験を支援していくことが, 学生のケアリング関係の充実につながることを示唆された。

#### < Abstract >

Purpose: To clearly identify the process by which nursing students form caring relationships with older adults through a gerontological nursing practice.

Methods: Using a grounded theory approach, a semi-structured interview of 24 nursing students was carried out. The caring settings of students and older adults were analyzed using constant comparison.

Results: As a process of students “being cared for” by older adults, one core category, “The sensation of being cared for by older adults,” was identified. Eight subcategories were also shown: “Respect for older adults,” “Feeling of distance with older adults,” “One’s own lack of confidence,” “Older adults with a close presence in one’s life,” “Joy gained from older adults,” “More fulfilling involvement with older adults,” “Joy of practical training,” and “Energy toward my future self.” The students’ image of and feelings about older adults became stronger feelings of closeness to them during practice on site. At the start of the clinical practice the students intended to provide care for the older adults on practice, however, they had experiences of being the ones “receiving” something from older adults, that is, they were cared for by them.

Conclusion: Students' experience of "being cared for" by older adults is meaningful in raising their feelings of "Respect for older adults." Enhancement of students' caring relationship by supporting students' experience of the subcategories was shown.

キーワード	
ケアリング	caring
高齢者	older adults
学生	students

## I. はじめに

ケアリング研究の先駆者であるミルトン・メイヤロフ (Milton Mayeroff) はケアについて、ケアする人・ケアされる人に生じる変化とともに成長発達をとげる関係と説明している<sup>1)</sup>。またネル・ノディングズ (Nel Noddings) は、ケアする人とケアされる人の関係性について、ケアされる人が認識していることの重要性を述べている<sup>2)</sup>。ケアリングは人と人との相互関係により成立するため、看護学生への教育はケアリングを組み込んでいる必要がある<sup>3)</sup>、看護教育の重要な要素となっている。

ケアリングに関する研究は1970年代以降、国内外ともに進められ、内容としては看護実践に関する研究に次いで、看護教育に関する研究が行われてきた<sup>4)</sup>。特に、看護教育の方向性としては、過去の研究成果に基づく中範囲理論の確立がケアリングを教育し実践する上で重要と指摘され<sup>5)</sup>、実習における学生と患者との人間関係形成の視点からも研究が進められた<sup>6)</sup>。また、学生のケアリング体験の内容を分析する研究<sup>7)</sup>や、学生と患者の相互行為場面の分析<sup>8)</sup>など、学生がどのようなケアリングを体験し、どのように相互行為が行われているかについても先行研究において明らかにされている。

さらに、高齢者とのケアリングについて、欧米では学生の実習体験を高齢者ケアに適用する研究<sup>9)</sup>があり、実習において学生の高齢者に対する肯定的感情を育成するといった教員の役割も指摘されている<sup>10)</sup>。日本においても、老年看護学概論を履修した学生が捉えたケアリングの意味の分析といった研究が進められている<sup>11)</sup>。このように、老年看護の教育においてもケアリングが重要であることが先行研究にお

いて指摘されているが、学生が高齢者とのようにケアリングを形成するか、そのプロセスについては十分に明確化されていないと思われる。

そこで本研究は、老年看護学実習後に学生がケアする体験もしくはケアされる体験をしたと振り返った場面を分析し、学生が高齢者とケアリングを形成するプロセスを明らかにすることを目的とした。

## II. 用語の定義

主な用語は次のように定義した。

「老年看護学実習」：高齢者施設もしくは病院で、65歳以上の高齢者を受け持つ実習

「学生」：看護を学ぶ大学生

「ケアリング」：ケアする人・ケアされる人に生じる変化と共に成長発達をとげる関係<sup>1)</sup>

「ケアされる体験」：老年看護学実習の中で、高齢者から思いやりや気遣いをしてもらったと学生自身が感じる体験

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究はグラウンデッド・セオリー・アプローチ<sup>12)13)</sup>を用いた。その理由として、老年看護学実習は学生と高齢者との相互作用により成り立つ実習であるため、学生が高齢者をどのようにとらえ反応するか、高齢者との関係性を理解するためにシンボリック相互作用論に基づくグラウンデッド・セオリーが適切と考えた。

### 2. 研究参加者

研究参加者は2011年度に老年看護学実習を行ったA看護大学3・4年生、男性2名、女性22名、計24

名であった。学生は看護学に関係する講義科目をほぼ修得済みであり、基礎・成人・老年看護学等の講義においてケアリングという概念について学習していた。

### 3. データ収集方法

実習最終日に半構造化面接を実施し、学生の同意を得た上で内容をICレコーダに録音し逐語録を作成した。インタビューガイドとして、高齢者との関わりの中で印象に残っている体験、高齢者との関わりによる学び、高齢者に対するイメージといった質問項目を設定し面接を進めた。その後、継続比較分析によりインタビュー内容を検討し、高齢者との関わりを通して得たもの、受け持ち高齢者に抱いた感情などの質問を加えた。

また、分析結果をもとに理論的サンプリングを行い、新たなラベル・カテゴリーが抽出されなくなった段階で、少数派の状況としてケアリング体験が少ないと思われる3名に面接し、さらに分析を行った。その上でカテゴリーのプロパティやディメンションに関する新たな情報がないことを確認し理論的飽和と判断した。データ収集期間は2011年9月から2012年6月であった。

### 4. データ分析方法

面接内容を文字に変換したものをデータとし文脈を把握するため何度も読み込んだ。その後、データを切片化しオープン・コード化を行った。オープン・コード化においてはプロパティとディメンションを抽出しラベルをつけ、さらに似たラベル同士をまとめカテゴリー名をつけた(表1)。

次に、軸足コード化を行い「条件」「行為/相互行為」「帰結」の視点から現象の構造とプロセスを把握した。また、カテゴリー同士を関連づけカテゴリー関連図を作成した。最後に選択コード化によって1つの現象をコアカテゴリーとして選択した。これらの作業を繰り返し継続比較分析することにより、高齢者から“ケアされる”体験のプロセスを明らかにした。

### 5. 研究結果の厳密性

結果の厳密性について次の4点を検討した<sup>14)</sup>。研究の確実性を得るために2012年9月に研究結果について研究参加者7名にメンバーチェックングを

行ったところ、自分の体験と合致しているという返答を全員から得た。適合性を確保するために研究参加者の語った言葉を詳細に記述し、データの解釈も表を用いて詳しく記述した。一貫性についてはデータ収集方法や分析手順を明らかにし、分析を一人で行うことにより一貫した研究過程を踏むよう努めた。さらに、研究結果を質的研究に精通した共同研究者と検討することによって確証性を高めた。

### 6. 倫理的配慮

本研究は大学の研究倫理審査会の承認後に実施した。同意の手続きとして、実習終了後、学生に研究の目的と意義を伝え参加の意向を確認した。その際に研究への参加や不参加は実習等の個人の評価に影響しないことを十分に伝えた。また、インタビューの途中で中断するなど同意を撤回する権利があることも伝えた。さらに、プライバシーの確保、個人情報の保護、研究結果を研究目的以外に使用しないこと等について説明した。

研究参加の同意が得られた学生には同意書を配布し面接の許可を得た。面接はプライバシーを守れる個室で行い、面接時間は学習に影響のないよう学生と相談の上設定した。

## IV. 結果

学生と高齢者とのケアリング場面を分析した結果、学生が高齢者から“ケアされる”体験のプロセスとして、1つのコアカテゴリーと8つのサブカテゴリーを抽出した(図1)。以下、コアカテゴリーを《》、サブカテゴリーを<>、ラベルを【】、学生の言葉を「」で示す。

### 1. 全体のストーリーライン

老年看護学実習(以下、実習)にあたり、学生は【高齢者への肯定的なイメージ】や【高齢者から得た肯定的な感情】といった<高齢者への尊敬>の気持ちを抱いていた。その一方、【高齢者と接する機会の少なさ】や【高齢者と接することへの戸惑い】のある学生もみられた。このような<高齢者との距離感>は【実習への戸惑い】や、学生である<自分への自信のなさ>につながっていた。

様々な思いを持って実習に臨んだ学生は、施設や

表1 オープン・コード化の例(研究参加者3の分析の一部)

No.	データ(ゴシック体の部分を中心にプロパティと ディメンションを抽出)	プロパティ:ディメンション	ラベル名	カテゴリー名
1	帰校日とかで一日空いた日の後に行くと、忘れてるかなあって思ってたんですけど、なんか、「覚えてるよ」とか言ってもらったことがあったりとか、「あなたの顔みると元気になるわ」とか言ってもらって癒されたというか。	高齢者の言葉から得たこと: 「癒された」	高齢者から癒されている自分	高齢者からケアされる感覚
2	あと、最後の日だと、「こんなに元気になってあなたのおかげやわ」とか言ってくれて嬉しかったのと、全体的にすごい感謝の言葉がたくさん出てくる方で、「ありがとう」とか、	学生の嬉しさの度合い:大 高齢者の学生への感謝の度合い:高い (元気になるわ、あなたのおかげ、ありがとうなど感謝の言葉がたくさん出てくる)	高齢者から感謝される体験	高齢者から得る喜び
3	嬉しくてがんばろうと思いました。なんか、したことに対して感謝の言葉がすごく返ってくるから、やりがいがあるというか。	実習への意欲:大 (がんばろう、やりがいがある)	実習へのやりがい	実習することの喜び
4	だから、パンフレットつくったりとかして。パンフレットも、よく自分で「私はしゃべれる」とか「目が見える」とかおっしゃる方だったんで、あそうか、きっと見えるってことは自信がある方なんだなと思ったので、そこは嫌な思いさせたくないなって思って、字も大きすぎないようにしたり。	実習中の工夫度:中 (パンフレットの作成、目には自信があるので字を大きすぎないよう工夫)	実習で試行錯誤した体験	実習することの喜び
5	私はおじいさんおばあさんもないし、前はがんとかこういうイメージがあって、私が提案して嫌とか言われたらどうしようかと思ってたけど、	高齢者の良いイメージ(実習前):低い (がんこ、嫌とか言われたらどうしよう)	高齢者のイメージの変化	身近な存在となる高齢者
6	結構受け入れてくれる方だったんで。なんか、思ったよりコミュニケーションとりやすかったのはイメージとは違ったかな。しっかりしてるなってそれは感じました。	高齢者の良いイメージ(実習中):高い (受け入れてくれる、コミュニケーションがとりやすい、しっかりしている)	高齢者のイメージの変化	身近な存在となる高齢者
7	あと、入浴の時に洗わせてもらったんですけど、「学生だから何かいつもとちがうぞ」みたいな、怒るんではなく教えてくれるっていうか、「いつもそんな丁寧にせんぞ」とか、学生ってわかって言ってくれたり。色々説明してくれたり、横に座るとずっとしゃべってくれる感じでした。	高齢者から「してもらった」感覚:大 (教えてくれる、学生とわかって言ってくれる、説明してくれる、ずっとしゃべってくれる)	高齢者から教わっている自分	身近な存在となる高齢者

病院で【高齢者との会話の広がり】や【高齢者との生活場面の共有】を体験した。高齢者との関係性を構築することにより学生の【高齢者のイメージが変化】し、高齢者を身近な存在として感じられるようになり、【高齢者への信頼】が増したと表現した学生もあった。

また、学生は実習を進めるなかで【高齢者から評価される体験】【高齢者から感謝される体験】や、【高齢者の笑顔をみる喜び】【高齢者から受け入れられた感覚】を得た。このような肯定的な体験は学生にとって、＜高齢者から得る喜び＞につながった。そして喜びを受けただけでなく、自分達も【高齢者への感謝の気持ち】を表現し、実習において【良い経験をしたという満足感】を得ることにより、相互作用としての＜高齢者との充実した関わり＞を実感していた。

並行して、学生は【実習で試行錯誤した体験】や、治療過程やリハビリテーションにおいて【高齢者ががんばる姿からの学び】を得て、【実習へのやりがい】

を感じていた。これらの体験や感情の動きを通して得た＜実習することの喜び＞は【実習を通してつかんだ手堅さ】や【次の実習への意欲】になり、＜明日の自分への活力＞を感じる体験となっていた。

さらに、高齢者との相互作用の中で、学生は【高齢者から心遣いされている自分】【高齢者から教わっている自分】【高齢者から癒されている自分】を感じていた。高齢者をケアしようと実習に臨んだ学生は、逆に＜高齢者からケアされる感覚＞を抱き、最初はその体験に戸惑いながらも、高齢者にケアされる自分を受け入れていった。このような体験は＜高齢者への尊敬＞という学生の感情を強化すると推測された。これらが高齢者から“ケアされる”体験のプロセスである。このプロセスについてカテゴリーごとにデータを示す。

2. 高齢者に対する学生の感情:＜高齢者への尊敬＞＜高齢者との距離感＞＜自分への自信のなさ＞

老年看護学に関する講義や、過去の実習体験、また幼少期の思い出などにより、学生は高齢者のイメージを形成していた。

「私の祖父や祖母っていうのは本当に大事にしてくれて、それが小さな頃からで、決して物をもらったから嬉しいとかいうのではなくて、ちょっとした言葉、電話一つにしても、『風邪ひいたらあかんよ』だったりとか受験の時とかでも『毎日拜んでるからね』とか、本当に毎日毎日仏さんに向かって拜んでもらったりとかして、まず根本にそういう祖父であったり祖母のイメージがあるんです。」(学生 20)

「高齢者って私のおばあちゃんとか今まで受け持った患者さんしかわからなくて、その患者さんたちはすごく優しくて良くしてくれたっていうイメージです。」(学生 10)

このような学生の高齢者に対する肯定的な感情より、**<高齢者への尊敬>**というカテゴリを抽出した。

また、高齢者と接した経験が少ない学生も全体の4分の1程みられた。

「高齢者さんというと実家がおばあちゃんとか一緒に住んでいないので、あんまり接する機会がなかったの。」(学生 12)

「自分の祖父や祖母で認知症をもっている人がいなくて、認知症のある人と自分が関わっていくにはどうしたらいいかわからなくて。」(学生 18)

「言葉遣いも、まだ私そんな未熟だし、どういう風に声をかけていくかが難しいなと思って。」(学生 5)

このような高齢者と接する機会の少なさや、どのように接すればよいかわからないという感情より、**<高齢者との距離感>**、実習初期に多くみられた学生の戸惑いより**<自分への自信のなさ>**のカテゴリを抽出した。

### 3. 実習を通して得た学生の感情：<身近な存在となる高齢者>

高齢者との会話や日常生活援助を通して、距離感のあった高齢者を少しずつ身近な存在として感じるようになったと約8割の学生が語った。

「話しているときも、こっちから話すばかりで

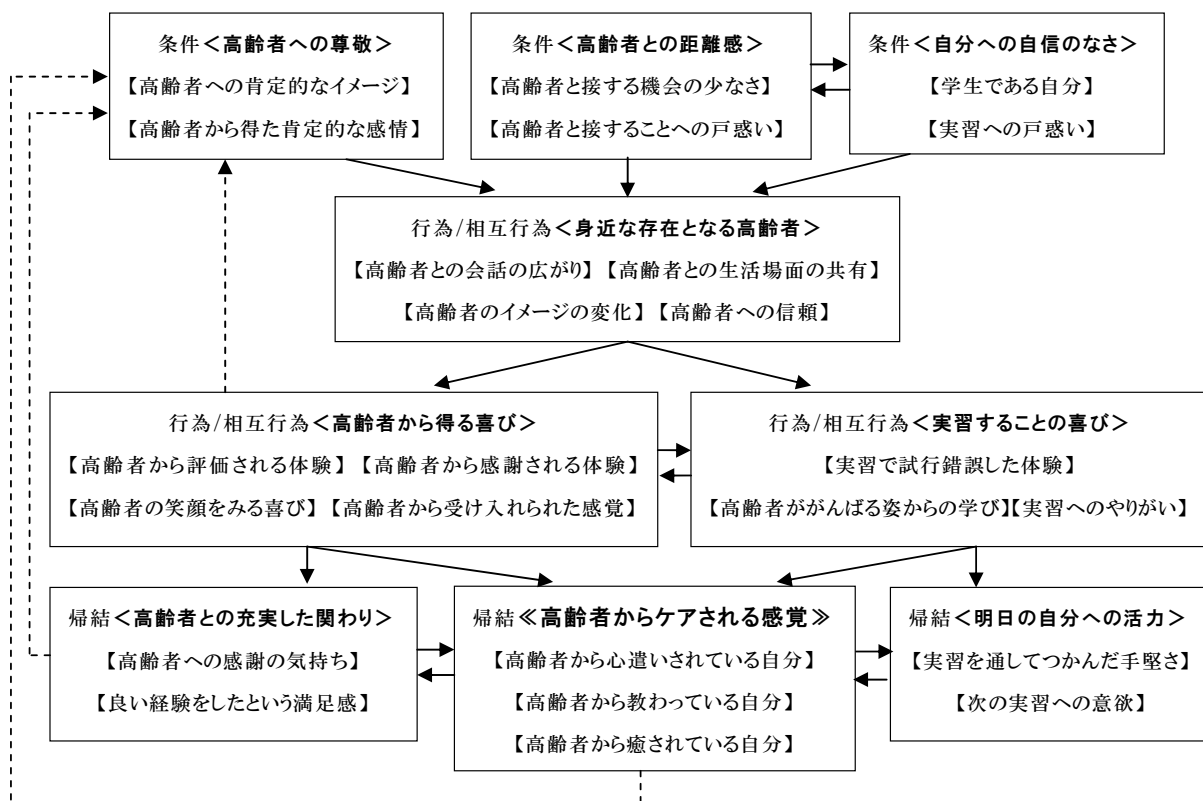


図1 高齢者から“ケアされる”体験に関わるカテゴリ関連図

《>コアカテゴリ、<>サブカテゴリ、【】ラベル、→カテゴリの関係、→点線は推測される関係

はなくて患者さんから話しかけてくれることが多くなったりすると近づいているのかなというふうに感じました。」(学生 16)

「散歩とかで長い会話はできないけど、『秋ですね』『そうですね』とか、『寒いですね』『そうですね』とかいう会話があって、そういう会話はできるようになったし、『きれいですね』とか私からも言ったりとかで、寒さを一緒に感じたり、一緒に過ごすことができ、喜んでもらったのが一番うれしかったです。」(学生 3)

これらの語りより、**<身近な存在となる高齢者>**というカテゴリーを抽出した。

#### 4. 高齢者と学生との相互作用：**<高齢者から得る喜び>****<高齢者との充実した関わり>**

高齢者との関係を築き始めた学生は、さらに高齢者から「よかった」と評価の言葉を得たり、「ありがとう」と感謝される体験をしていた。

「最後に別れるときに『すごく元気にしてくれてありがとうね』って言われて、『ちょっと泣いてしまうな』ってことも言われて私がびっくりしたんですけど、『ありがとう』って言われたんですけど嬉しかったです。ほんと高齢者の方ってあんまり受け持てなかったんですけど、自分を受け入れてくれたのかなって。」(学生 4)

「レクリエーションで玉入れして横で見ていて『全部入りましたね』って言ったらすごく嬉しそうで、一番笑顔で、その時すごく嬉しかったです。」(学生 2)

このような高齢者から受け入れられた感覚や、高齢者の笑顔を見ると自分も嬉しくなるといった感情より、**<高齢者から得る喜び>**のカテゴリーを抽出した。さらに、学生は高齢者から肯定的な感情を得て、学生自身も高齢者に感謝の気持ちを表現するといった相互作用が行われた。

「実習がああ、良かったって胸張って言えるくらいに思っています。本当に、こんなに全力でつばした2週間は無いくらいな。さっきも先生に胸張って『全力でやったんで』って言ったんですけど、そうさせてくれたのも、あの高齢者さんがそういう人だったからということにつけるので、本当に感謝しています。」(学生 7)

このような学生が実習を通して得た満足感や、高

齢者への感謝の気持ちより、**<高齢者との充実した関わり>**のカテゴリーを抽出した。

#### 5. 学生にとっての実習体験：**<実習することの喜び>****<明日の自分への活力>**

実習において学生は、高齢者のために何か自分ができることはないかと、全員が試行錯誤をしていた。

「病棟内のリハビリを今までは誘ってもなかなかやろうって思ってくれなかったんですけど、私がリハビリの表を作って提案したことで『やってみようかな』というようなことを言ってくれて。それで部屋に戻るときに『今からリハビリやってから戻ろうかな』みたいなことを言ってくれたのが一番印象に残っています。」(学生 8)

「リハビリもつらいはずなのに、がんばろうっていう姿勢があって。私は若くて何の障害も持っていないので、自分ももっとがんばらなくちゃいけないなってことを思わせてくれた。」(学生 6)

このような自分のケアに対する高齢者の反応や、大変な状況においても努力する高齢者の姿から得た感情より、**<実習することの喜び>**のカテゴリーを抽出した。さらに、学生は実習での体験を通して「コツをつかんだ」という手堅い感覚を得ていた。

「最初は言葉が聞き取りづらいつか思っていたのも、話しているうちに、だんだん話し方とかもつかめてくるじゃないですか、それで結構、上手く会話がかみ合ってきたので、すごく良かったと思います。」(学生 5)

「『がんばりなさいね』って最後に言ってくれて、『私もがんばります』って言ってくださって。何にも出来なかったって思っていた時に言われたので、すごくびっくりしたし良かったなって。これからもがんばろうって思います。高齢者の方の言葉で次の実習もがんばろうって思えます。」(学生 4)

このような次も頑張ろうという学生の感情より、**<明日の自分への活力>**のカテゴリーを抽出した。

#### 6. 高齢者と学生のケアリング場面：**<高齢者からケアされる感覚>**

高齢者との相互作用を通して、24名のうち15名の学生が**<高齢者からケアされる感覚>**を得たと話した。

「話しとかして長くなってくると、『足大丈夫

夫?』とか、しゃがんでたりすると『足えらくない?』とか、『椅子をこっちに持ってきて座りな』とか、そういう何ていうんですか、気遣いだったりとか、私のことを考えながら話をしてくれる場面がけっこうあって。で、すごい思いやりがある人だなっていうか、すごい気をつけてくれているのかなっていう場面がいっぱいありました。」(学生 21)

「生き方の秘訣みたいなのを教えてもらって、何かすごく教えてもらったっていうふうに感じました。私の性格とかも考慮して、こういう子だから落ち込んだりすることもあるだろうけどっていう感じで、こう何だろ、助言?アドバイスしてくれて、すごく私は嬉しくて。すごく良い経験ができて、その言葉をもらった時にうるっときて、こうやって長く生きてきたから、こういう事を言えるんだなって。何だろ、私がこう、看護させてもらってるというよりは、何かそういう言葉をもらって、私が看護されてるっていう気になりました。」(学生1)

このように高齢者からの助言を含め、高齢者からの心遣いや、高齢者から配慮されたという感覚が、学生の感じたケアされる感覚であったためコアカテゴリとした。高齢者をケアするために実習に臨んだ自分が高齢者にケアされていることに対して「これでいいのだろうか」と戸惑いを感じた学生もあったが、最終的に自分を気遣ってくれる高齢者への感謝の言葉を表現していた。

## V. 考察

### 1. 学生が高齢者からケアされる体験

学生の高齢者へのイメージや感情は、実習体験を通して高齢者を身近な存在として感じるにより強くなっていた。特に学生は高齢者に“ケアしよう”と実習に臨んだ結果、“評価される”“感謝される”“受け入れられる”“心遣いされる”“教わる”“癒される”など、高齢者から“与えられる”体験をしていた。先行研究において、看護学生が体験したケアリングについて“話をきいてくれた”“励ましてくれた”などの言葉が抽出されており<sup>7)</sup>、老年期がん患者と看護師のケアリングパートナーシップとして患者の人としての成長を助けることが看護である<sup>15)</sup>とされている。これらは「してもらう」という受動的な存在である学生や、

「助ける」という能動的な存在である看護師の姿を示している。このような先行研究の関係性は、受動的・能動的に関わらず“一方向”の関係性を示していると思われるが、本研究結果の特徴は学生と高齢者との関係性が“双方向”であることを明確化した点にあると考える。

学生は“何かしたい”と高齢者に接し、逆に高齢者に“与えられる”体験をしていた。また、それに対して学生は感謝の言葉を表現し、高齢者のためにより良いケアを工夫し、さらに高齢者から肯定的な評価を受けるといった関係性は、高齢者と学生の相互作用である。これらの関係性が学生にとって実習経験に留まらず、明日への活力として自己の成長につながっていたという結果は、学生が高齢者とケアリング体験をしたことから生じたと考ええる。

### 2. 学生が高齢者からケアされる体験を認識する意義

看護実践の場で、高齢者を“ケアを受ける”受動的な存在として捉えるか、“他者をケアする”能動的な存在として捉えるかには大きな差があると思われる。現在日本の高齢化率は23.3%であり、さらなる老年人口の増加が予測されている<sup>16)</sup>。高齢者がその人らしく生きることを支援するためには、看護学生への教育において高齢者観を育むことに大きな意味があると考ええる。本研究により明らかになった“高齢者からケアされる体験”は学生にとって肯定的な感情につながる体験であり、多くの学生が実習前に感じていた高齢者を尊敬する気持ちを、さらに強くする体験となったと推測できる。

高齢者に対する肯定・否定的感情は看護教育の中で有意な変化がみられなかった<sup>17)</sup>ことや、学生の高齢者への肯定的な感情を実習により強化していくことが重要<sup>18)</sup>と指摘されているように、高齢者への肯定的な感情を育むことは看護教育における重要な課題である。本研究により、学生を思いやる“能動的な存在としての高齢者像”を示したことは、高齢者が社会の中で重要な存在であることを示す教育上の根拠となると思われる。

### 3. 老年看護学実習への適用

先行研究において、老年看護学概論の履修後に

学生は、その人らしさの支援といった高齢者看護の特徴を理解していたこと<sup>11)</sup>や、基礎実習終了後の学生が相手を大切にすることを重要と認識していた<sup>19)</sup>ことが明らかにされている。このように講義や基礎実習を通して学生に芽生えたケアリングの感覚を、老年看護学実習を通して高めることが重要と考える。ただし、学生は知識としてケアリングを修得していても、看護する上でどのように用いればよいか分からない<sup>20)</sup>という研究結果や、認知症高齢者への対応が分からずに傷ついた<sup>21)</sup>という報告がある。また、実習中に学生は、看護師と患者とのコミュニケーションやケアリング場面が期待していたよりも少ないと感じていた<sup>22)</sup>という現状もあるため、学生がケアリング関係を実感するためには教員の支援が必要となる。

本研究により明らかになった高齢者と学生のケアリング関係の中でも、サブカテゴリーにみられる学生の体験を支援していくことにより、学生のケアリング体験につなげることができると思う。

## VI. 研究の限界と課題

本研究は一大学の対象者に限られているため、他大学や他の看護師養成機関の学生は異なる体験をしている可能性がある。さらに対象者の範囲を拡大し研究結果の活用範囲を広める必要がある。

## VII. 結論

学生が高齢者よりケアされたと振り返った場面を分析した結果、学生が高齢者から“ケアされる”体験のプロセスとして、1つのコアカテゴリーと8つのサブカテゴリーが明らかになった。＜高齢者への尊敬＞＜高齢者との距離感＞＜自分への自信のなさ＞という感情を抱いて老年看護学実習に臨んだ学生は、実習を通して高齢者が＜身近な存在＞となり、＜高齢者から得る喜び＞を経て＜高齢者との充実した関わり＞といった相互作用を体験していた。また、＜実習することの喜び＞を通して＜明日の自分への活力＞を感じていた。＜高齢者からケアされる感覚＞に戸惑いながらも、学生は高齢者にケアされる自分を受け入れていった。これらの体験は＜高齢者への尊敬＞という学生の感情を高めるといった意義があり、学生の体験を支援することによりケアリング関係の充実

につながることを示唆された。

## 参考文献

- 1) Mayeroff M: On caring. Harper & Row, Publishers, Inc., New York, 1971 (田村真, 向野宣之訳: ケアの本質 生きることの意味 (初版), 185, ゆみる出版, 東京, 1987)
- 2) Noddigs N: Caring. A feminine approach to ethics & moral education. The Regents of the University of California, 1984 (立山善康, 林泰成, 清水重樹他: ケアリング 倫理と道徳の教育 - 女性の観点から (初版), 93-123, 晃洋書房, 京都, 1997)
- 3) 安酸史子: 看護教育におけるケアリングと平和, 看護研究, 45:565-572, 2012
- 4) 山内朋子, 筒井真奈美: ケアリングの研究動向, 看護研究, 44:129-148, 2011
- 5) 佐藤幸子, 井上京子, 新野美紀, 鎌田美千子, 小林美名子, 藤澤洋子, 矢本美子: 看護におけるケアリング概念の検討 - わが国におけるケアリングに関する研究の分析から -, 山形保健医療研究, 7:41-48, 2004
- 6) 水畑美穂, 菊井和子: 臨床実習における学生と患者の人間関係形成におけるプロセス - ベナー及びワトソン理論による分析 -, 川崎医療福祉学会誌, 15:149-159, 2005
- 7) 岡久玲子, 多田敏子, 松下恭子, 藤井智恵子: 看護学生が記述したケアリング体験の中に含まれている言葉, Quality of Life Journal, 12:145-150, 2011
- 8) 田村美子, 内山久美, 久木原博子, 栗納由記子, 床島正志, 阪本恵子: 臨床実習におけるケアリング教育 - 学生と患者との相互行為場面からの分析 -, 看護・保健科学研究誌, 12:56-63, 2012
- 9) Alabaster E.: Involving students in the challenges of caring for older people, Nursing older people, 19:23-28, 2007
- 10) Koh L.C.: Student attitudes and educational a support in caring for older people - A review of literature, Nurse Education in



- Practice, 12:16-20,2012
- 11) 山本浩子,中村もとゑ,森川千鶴子,小園由味恵,平賀睦:老年看護学概論履修後に学生が捉えた「ヒューマン・ケアリングの意味」,日本看護福祉学誌, 17:147-157,2012
- 12) Strauss A.,Corbin J.: Basics of qualitative research.-Techniques and procedures for developing Grounded Theory,2nd ed. Sage Publication,Inc,Newbury Park,1998( 操華子, 森岡崇: 質的研究の基礎グラウンデッド・セオリー 開発の技法と手順 (2 版 ),127-268 医学書院, 東京,2004)
- 13) Corbin J., Strauss A.: Basics of qualitative research.-Techniques and procedures for developing Grounded Theory,3rd ed.Sage Publication,Inc,Newbury Park, 2008( 操華子, 森岡崇: 質的研究の基礎グラウンデッド・セオリー 開発の技法と手順 (3 版 ),61-89, 医学書院, 東京,2012)
- 14) Lincoln Y.S., Guba E.G.: Naturalistic inquiry, Sage, Newbury Park, 289-331,CA,1985
- 15) 高木真理, 遠藤恵美子: 老年期がん患者と看護師のケアリングパートナーシップの過程 -Margaret Newman の理論に基づいた実践的看護研究 -, 日本がん看護学会誌, 19:59-67,2005
- 16) 厚生労働統計協会: 国民衛生の動向・厚生 の指標増刊, 59:42,2012
- 17) Holroyd A.,Dahlke S.,Fehr C.,Jung P.,Hunter A.: Attitudes toward aging:Implications for a caring profession, Journal of Nursing Education, 48:374-380,2009
- 18) Pan I-Ju.,Edwards H.,Chang A.:Taiwanese Nursing Students' attitudes toward older people, Journal of Gerontological Nursing,35: 50-55,2009
- 19) 横山孝子,内山久美,大澤早苗: 「看護者に必要な姿勢・態度」に関する学生の意識-4年課程1年次における基礎看護学実習I終了後の調査から-, 保健科学研究誌, 2:87-94,2005
- 20) Drumm J.,Chase S. K.: Learning Caring: The student's experience,International Journal for Human Caring,14:31-37,2010
- 21) Robinson A.,Cubit K.: Caring for older people with dementia in residential care: nursing students' experiences, Journal of Advanced Nursing,59:255-263,2007
- 22) Pearcey P.: 'Caring?'It's the little things we are not supposed to do anymore', International Journal of Nursing Practice,16:51-56,2010